



日本初コミュニティ型こどもホスピス



内外の活動がお互いに感じられる。



家と家の間に生まれる小さな庭



6つの家と道の空間がつくる中庭



2017年 第58回
BCS賞受賞作品紹介

TSURUMI こどもホスピス

選評

TSURUMIこどもホスピスは病院でも福祉施設でもない、民間団体が寄付金によって運営する日本初の「コミュニティ型こどもホスピス」である。このこどもホスピスは、今までにないプログラムの持つ新しいビルディングタイプとして、完全に制御された病院とはまったく違った環境で難病のこどもと家族が、日々の負担から逃れて特別な時間を過ごす「第二の家」として構想され、二〇一六年に完成した。敷地は、大阪市の鶴見緑地駅からほど近い、花博記念公園鶴見緑地の一角に位置する。市の公募により建築主が二〇一四年に「大阪市鶴見緑地駅前エリア整備・管理運営事業者」として選出され、その前年にはユニクロのクローズ・フォア・スマイル・プロジェクトに応募し、こどもたちに夢と希望を提供するアイデアのひとつとして選出され資金獲得できたことが、こどもホスピス構想

の実現に大きくつながった。

「家であるだけでなく、村のような場所」というコンセプトが設計では掲げられ、家のようにくつろげる空間と共に、村のように多様なスケールの空間や居場所が設けられている。建築は分棟配置された二階建てで原初的な家型をした「六つの家」が、「道の空間」と呼ばれる廊下で繋がっている。おのおの「家」には、機能とさまざまな特徴を持った部屋が収められ、それらがズレながら配置されることで家と家の間には、あまりのスペースや小さな庭が生まれ、こどもたちが少し離れて休んだりひとりで泣いたりできる居場所が用意されている。

構造はズレながら配置された分棟の木造の家を、道の空間が一体化する構成となっている。建物全体の地震力を六つの家に負担させることで、道の空間は耐力壁を設けない構造となり見通しのよさを確保している。木材は一般流通材を活用し、材長を六尺以下に抑えることでコスト的にも配慮されている。環境についても機械制御さ

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。
この賞は、1960年にはじまり2017年で58回を数えます。

< 2017年 第58回 BCS賞受賞作品 > 静岡県草薙総合運動場体育館(このはなアリーナ) 新宿東宝ビル 太子町新庁舎「太子の環」人がつどう・まちをめぐる・太子がつながる 竹中大工道具館新館 敦賀駅交流施設「オルパーク」駅前広場キャノピー TSURUMIこどもホスピス 東京駅八重洲口開発: グランルーフ、グラントウキョウノースタワー、グラントウキョウサウスタワー、駅前広場 TOTOミュージアム 桐朋学園大学調布キャンパス1号館 しまエコミューズタウン TOYAMAキラリ 虎ノ門ヒルズ(環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業Ⅲ街区) 直島ホール MIZKAN MUSEUM YKK80ビル [特別賞] 日本橋ダイヤビルディング「江戸橋倉庫ビル」の保存・再生 早稲田大学 早稲田キャンパス3号館



建築主 「子どもの生きるを支える」地域における より 小児緩和ケアへの挑戦

TSURUMIこどもホスピスは、子どもたちやご家族の楽しそうな笑い声があちこちから聞こえてくることもあり、「想像していた場所とは全く違いますね」とか「住みたいです!」という言葉をよくいただきます。訪れることがとっても楽しみな「お家」なのです。

もちろん、子どもたちの多くは、生命に関わるような重い病気と共に暮らしています。そうした子どもたちの課題は、同世代の子どもと同

じような、遊びや学び、その子らしく成長できる機会が著しく損なわれていることにあります。私たちは、医療とも連携しながら、子どもとご家族を地域の立場から支えようと取り組んでいます。子どもホスピスが当たり前を選択できる未来が必要です。受賞はその広がりを助けてくれるとても大きな出来事でした。すべての関係者に心より御礼申し上げます。チルドレンファースト。すべては子どもたちの為に！



一般社団法人
こどものホスピスプロジェクト
代表理事

高場秀樹

Hideki Takaba

設計者 より

家であるだけでなく、村のような場所

日本初の「コミュニティ型こどもホスピス」の設計を進めるにあたり、まず重い病気の子どもと家族がここでどう過ごすのか、生活のシーンを思い描くことから始めました。辿り着いたコンセプトは「家であるだけでなく、村のような場所」。その時の気持ちに依拠して居場所が選べたり、それぞれの居場所が孤立せずに緩やかにつながっている、家のように寛げ、村のように多様な場をつくるのが大切だと考えました。

これを体現するように建物は、6つの家が道の空間によって繋がり、更に公園へ開かれています。難病児の家族と地域住民が触れ合う交流の拠点となり、地域全体で彼らを支える、心を動かすやさしい風景を目指しました。この風景が社会に広がり、更なる支援の輪が広がることを、そして第2、第3の「コミュニティ型こどもホスピス」の道標となることを願っています。



大成建設株式会社
設計本部
プロジェクト・アーキテクト

出口 亮

Ryo Deguchi

施工者 より 「子どもたちへの想い」から 充実し楽しかった工事

TSURUMIこどもホスピスは、建築主、設計者、施工者、地域住民の方の愛情が詰まった建物です。私は25年ほど現場で働いていますが木造建築の経験はほとんど無く、工事開始時は一抹の不安を抱えていましたが、プロジェクトが目指すものを理解した後は「この建物を使う子どもと家族のために良い建物を作りたい」と、気持ちが大きく変化しました。

その想いは大工の棟梁を始めとして多くの職人と共有し、共感されました。毎日により

良い建物を目指して彼らと話し、特に子どもたちが直接触れる木部や仕上げなど心を込めて丁寧に仕事をしました。

振り返ると日々、充実し楽しい時間でした。建物引き渡しの時にはこれまでにない達成感と寂しさを感じました。私たち施工者の想いが詰まったこの建物を、笑顔で楽しそうに使っていただいている姿を見るたびに、全力で取り組んだ日々が思い出されます。



大成建設株式会社 関西支店
品質管理室 課長(現職)
作業所次席(当時)

大野龍二

Ryuji Ohno



6つの家を繋ぐ道の空間



家型フレームがつくる出会いの場



家の暖かい雰囲気を演出する照明

れた病院とは違った、家のようなありのままの環境づくりを目指し、吹き抜け部の温度差を利用した重力換気や季節風を考慮した自然通風など、できる限り空調設備に頼ることのない計画となっている。「家型エアフローウォール」は夏季の熱負荷が大きい南西面の外壁に設けられた通気層で、そこに居室からの排気を送って外壁の熱負荷を効率的に排除するために考案された仕組みであるが、原寸モックアップにより性能確認を行ったうえで実現に至っている。設備部材が露出しない壁面や、軒先、ケラ

バのミニマムディテールが原初的な家型デザインを強調している。外構については、今後の維持管理の一環として近隣住民や学生たちのボランティアと共にイベントやワークショップの中で整備する計画だと聞くが、このような活動を通じて多くの人が関わるきっかけや交流の場が生まれることが期待される。本建築は、事業計画と共に今後の日本におけるこどもホスピスの先駆的事例として参照されるものとなるであろう。

【選考委員】

木下庸子・堀場弘・山本平生

計画概要

建築主：(一社) こどものホスピスプロジェクト

設計者：大成建設(株)

施工者：大成建設(株)

所在地：大阪府大阪市鶴見区浜 1-1-77
竣工日：2015年12月22日

敷地面積：2,719㎡
建築面積：636㎡
延床面積：979㎡

階数：地上2階
構造：木造